

戦後 70 年 山田洋次監督語る

写真は中日新聞 8 月 16 日 1 面である。山田洋次監督が戦後 70 年を語る。さすがに心に迫るものがある。

14 日に戦後 70 年の首相談話が発表されましたが、中国や韓国の人たちにどれだけひどいことをしてきたのか、思いが込められていません。なぜもっと率直に謝罪できないのでしょうか。ドイツのメンケル首相はアウシュビッツの解放記念日（1 月 27 日）に「これはドイツの恥の歴史だ」と明言しています。

一方で、日本は世界一の憲法を持っています。軍備を持たないと言っているんだから、それが最高の平和主義。でも、国会で審議されている安保関連法案は「何かあったら戦う」という内容になっている。「いざとなったら戦う」ではなくて、「いざとなっても戦わない」というのが、この国のあり方だったはずです。

新しい憲法ができた時、僕らの世代は中学生でした。軍隊を持たない国になるという感動は忘れられません。それなのに、なぜ 9 条の理念を変えようとするのでしょうか。なぜ米国の戦争を手伝うための法律を作らなきゃならないのでしょうか。「戸締まりしなきゃ泥棒が入る」という野蛮なロジックで繰り返す政治は、決して良くないはずです。

原発の再稼働も同じ。こんなに暑い日が続いて目いっぱいクーラーを使っているのに、電力は足りている。なのに、危険な原発を再稼働する理由について、僕らは国から何の答えももらっていません。

「男はつらいよ」の主人公の寅さんは、常識が欠けていて教養がないことを自分でよく分かっている。その裏返しとして、面倒な問題や難しい問題を考えるためにいる学者や賢い人の考えに耳を傾けなきゃいけないことも、よく知っているんです。無知を知っているのかね。

安保法制も原発再稼働も、疑問を持つ人がたくさんいるんだから、その声に耳を傾けるのが政治ではないか。僕はそう思います。



(2015年8月20日)